

研究ノート

大学生の性行動の現状及び STD・望まない妊娠の予防に関する 効果的な介入の検討

小野寺 梓

目次

- I. はじめに
- II. 大学生の性行動と性に関する知識・意識
(1999 年と 2005 年の調査結果より)
 - 1. 大学生の性行動
 - 1) 性交経験について
 - 2) コンドーム使用について
 - 3) 避妊について
 - 2. 大学生の性に関する知識・意識
 - 1) 性に関する知識
 - 2) HIV リスク認知
 - 3) 性知識の情報源
 - 4) 性に関して知りたいこと
- III. STD 及び望まない妊娠の予防に対する効果的な介入内容・方法の指針 一文献検討結果より一
 - 1. 介入内容
 - 1) 国際的基準
 - 2) コンドームの活用について
 - 3) 性の健康に対する肯定的な価値観や意識の育成の必要性
 - 2. 介入方法
 - 1) 国際的基準
 - 2) 行動変容への介入
 - 3) スキルトレーニングによる介入
- IV. おわりに

I. はじめに

近年、10 代、20 代の人工妊娠中絶の多さや性感染症（以下 STD）の罹患率の増加が指摘されている¹⁾。厚生労働省の報告²⁾によると、平成 17 年度（2005 年）の 20 歳未満の人工妊娠中絶件数は 30,119 件で前年より 4,626 件減少している。15～49 歳の女子人口千対でみた人工妊娠中絶実施率も 20 歳未満

は 9.4 とこれも減少している。年齢階級別に見ると、20 歳未満では年齢が上がるにつれて人工妊娠中絶件数、実施率ともに高くなっており、19 歳が 17.2、18 歳が 12.5 となっている。他の年代に比べ 19 歳～20 代前半の人工妊娠中絶実施率は高く、年々減少に転じてはいるが問題となっている。また、人工妊娠中絶件数、実施率ともに最も多い年代は 20～24 歳の 72,217 件であり、前年より 2,494 件減少、実施率は 19.6 である。

STD の中で現在日本で最も多い疾患がクラミジア感染症である。女性の場合、放置しておくと不妊の原因にもなる疾患である。2002 年以降、減少傾向にあり 2005 年に報告された感染者数は 35,057 人で前年を約 3,000 人下回った³⁾。10 代、20 代の感染者が多く 2004 年のデータでは、男性では約 50%が女性では約 70%を占めている。このように特に女性でその傾向が目立っており、29 歳以下では男性患者数を約 2 倍上回る数が報告されている⁴⁾。

クラミジア感染症は減少傾向にあるものの、性器ヘルペス、尖圭コンジローマは年々増加しており、決して STD そのものが減少しているというわけではない。また、最もクラミジア感染症の罹患者が多かった 2002 年での東京都予防医学協会の調べによると、東京都内の産婦人科を何らかの理由で受診した女性について、クラミジアを疑って検査したところ、10 代では 30%を超える陽性率で 3 人に 1 人が感染していた⁵⁾。また、罹患率が増加しているヒトパピローマウイルス(HPV) は子宮頸癌を引き起こす悪性のものがあり、STD は単純に抗生物質を服用すれば完治するものばかりではない。つまり、青少年における STD は現在及び将来の彼らの健康を守る上で深刻な問題になっている。

その一方で大学生になると、男女ともに60%の学生は性交渉をもった経験があり、高校生の2倍以上の割合になり、学年があがるほどにその割合も多くなっている⁶⁾。平成17年の大学・短期大学進学率は52.3%と過去最高であり⁷⁾、年々進学率が上昇している中で大学生は見過ごすことができない大きな集団となっている。そのように大きい集団である大学生の性行動が活発になる中で、避妊法として最もよく使われているコンドームの正しいつけ方を知らない者も多いと聞く。同様に女性の排卵のサイクルや精子の寿命などを理解しているのは少数であるとのデータもある⁸⁾。また、大学入学以前にSTDに関する教育を受けてきても、自分もなり得ると意識している者は少ない傾向にある⁹⁾。STDに罹患するリスク因子として、不特定多数との性交や性交経験人数の多さが指摘されるが、全国の国立大学生に行なった質問紙調査によるとクラミジアに罹患したことがある女子大学生のうち、その60%は過去1年間の性交経験人数が1人であったことがわかった¹⁰⁾。このことから、STDの予防啓発を行なう際には、不特定多数との性行為のみがリスク因子であるという考えを見直していかななくてはならないことが示唆された。それに伴い、決まった相手としか性行為をしていないから自分はSTDとは関係ない、と思っている者の意識を変えていかななくてはならない必要性も出てきた。

一方で、性交経験がある大学生の中で、割合が高い初交年齢は男女ともに16～18歳であり高校生の時期に初交経験がある者も多い⁶⁾。男女とも初交時に避妊を実行した者は、現在も避妊を実行している割合が、初交時に避妊をしなかった者よりも高いことが指摘されており⁶⁾、初交前に避妊について意識を高めておくことは重要であると言える。

そのため、学校でどのように予防教育を行なっていけばよいか、研究が進められている。その中で木原が提唱するオーダーメイドの予防

教育（対象者の事前調査、その調査結果と行動理論を基にした教材開発、効果ある対策/教育継続のための事後評価から成る科学的根拠に基づく予防教育）を高校生に行った所、避妊、STDに関する知識と予防意識が上昇し、性関係の容認意識が減少、既に性経験を持っている生徒の予防行動が増加、しかし性行動の活発化は起こらなかった¹¹⁾。

このように学校教育の場での効果的な予防教育が研究される一方で、大学での予防教育、支援体制についてはあまり研究されていない。ここでは、大学の場合における予防教育、支援体制の必要性を述べ、効果的な予防教育のあり方の一例を報告する。

II 大学生の性行動と性に関する知識・意識 (1999年と2005年の調査結果より)

1. 大学生の性行動

1) 性交経験について

1999年に全国国立大学生に行なわれた質問紙調査（国立大学全体の約1/3が参加）¹¹⁾によると、セックスの経験のある学生の割合は、1年生の時点では男子24.2%、女子21.7%であるが、4年生になると男子63.9%、女子73.6%となり、半数近くの学生が大学在学中に経験していた。

一方、6年ごとに日本性教育研究会が行なっている質問紙調査によると、1999年では大学生の男子は62.5%、女子では50.5%に性交経験があったが¹²⁾、2005年の調査⁶⁾では、男子61.3%、女子61.1%と男子は僅かに減少しているが女子は10%近く増えており、男女間の格差が消失した。

また、この性交経験を年齢別に見た結果では、男子で「ある」と答えたものは18歳(38%)、19歳(51.5%)、20歳(57.5%)、21歳(67.6%)、22歳(72.6%)、となっており、18歳は高校3年生と大学1年生が混在している年齢であるが、18歳から19歳、20歳から21歳にかけて10%以上増えている。一方女子では18歳

(42.8%)、19 歳 (43%)、20 歳 (59.1%)、21 歳 (73.2%)、22 歳 (75.6%) となっており、19 歳から 20 歳、20 歳から 21 歳にかけて経験者が 14~16%増えている。この調査は専門学校生にも聞いており、18 から 22 歳は専門学校生と大学生が混在していると思われるが、高校卒業後の学生時代に性交経験者が増えることが推察される。

2) コンドーム使用について

コンドームの使用状況は全体で約 70%~80%で 95%は避妊を目的に使用していた。そのコンドーム使用の意思決定は、男子学生の 58.0%が自分で使用を決めるのに対し、自分で決める女子学生は 26.8%であり、コンドーム使用の主導権が男性側にあることが示唆された。また、コンドーム使用に対する考え方では、男子は「快感が損なわれる」が 61.3%、「相手から言われた時以外は使いたくない」が 15.2%と女子よりも高い傾向にあり、女子では「買うのは恥ずかしい」59.7%、「使用を自分から言い出せない」11.6%、などが男子よりも高い傾向にあった¹⁰⁾。

このことから、コンドーム使用の主導権は男性側が持ちつつも、男性はコンドームに対し否定的な考えが強く、相手から言われた時以外は使いたくない者もいる。一方で女性側は自分からコンドームの使用を言い出したり、決めたりできずに、男性に依存している傾向が強い。このような状況がコンドームを使わないセックスの背景にあることが示唆された。

一方、2005 年の調査⁶⁾ではコンドームを性交時に必ず使用しているのは男女とも約半数程度であった。このことから大学生の半数は妊娠、STD に対してリスクが高い状況にあることが推察された。

3) 避妊について

1999 年の調査¹²⁾ではセックスをするときに避妊を実行しているものは「いつもしている」

が男女とも 66%、場合によるが 26~30%いるが、その方法では 3 割近くの者が膈外射精を行っており、不確実な方法を行っていた。また、妊娠のリスクを背負うのは女性であるにも拘らず、自分から避妊を言い出す女子は 20.2%しかおらず、ここでも男性に依存していることが明らかになった。

また、避妊を実行しない人の理由では男子は「たぶん妊娠しないと思うから」「めんどくさいから」などの理由が多いが、女子では「準備していないことが多いから」が多かった。男性にコンドーム使用の意思決定を依存しているため、女性自らが準備をできずに避妊を行わない状況が示唆された結果となった。

一方、2005 年では⁶⁾、「いつもしている」が男子で 59.2%、女子で 62.4%、「場合による」が男女で 31~33%いるが、やはりここでも膈外射精をその方法とする者が男子では 21.4%、女子では 30.3%いた。また、男女ともピルを選択する者は 2%程度で少数であった。

2. 大学生の性に関する知識・意識

1) 性に関する知識

看護系大学生 1 年生に質問した妊娠に関わる知識の中で正答率が低かった項目は、精子の寿命、卵子の寿命、排卵の時期、で正答率は 10~30%であった。看護系大学生と言っても専門科目が始まっておらず、一般の大学生に近い状態であったことを考慮すると、妊娠に関する重要な知識を知らない学生が多いことが推察される⁹⁾。

一方、STD・HIV に関わる知識では前述した全国国立大学生への調査¹⁰⁾によると、正答率が低かった項目は「口を使ったセックスで口から性器に STD が感染する可能性がある」「STD にかかっていると HIV に感染しやすい」で半数以下が不正解であった。HIV の感染経路に関する項目では 90%近くの高い正答率であった。HIV に関する教育は受けてきていて知識はあっても、STD に関する知識が十分でない結果

となった。

一方、2005 年の調査では⁶⁾、「膣外射精は確実な避妊の方法である」という質問への正当率は男子で 84.2%、女子で 89.6%と高い。また STD に関する知識も「性感染症を治療しないと不妊症になることがある」で男子 63.8%、女子 73.9%の正答率、「口を使ったセックスでは性感染症はうつらない」が男子 68.6%、女子 72.8%の正答率、「性感染症にかかると必ず自覚症状が出る」で男子 77.1%、女子 83%といずれも正答率は高く、6 年前よりも知識は定着していると思われる。

しかし、前述したとおり、相変わらず膣外射精を避妊法として使っていたり、コンドームのあいまいな使用状況があったり、行動は変化していない様子が読み取れる。

2) HIV リスク認知

1999 年の調査による、HIV リスク認知として、「現在あなた自身がセックスを通して HIV に感染する可能性はどの程度だと思いますか」という質問に対し、約 80%の学生は「可能性が全くない」「非常に低い」「低い」と答え、「中くらい」「高い」「非常に高い」と答えた学生は 10%であった¹⁰⁾。

HIV リスクが低いと思う理由では「セックスの経験がないから」が 56.6%と最も多いが、一方で「決まった人とはしかセックスをしていないから」「(セックスの経験があっても) 現在、セックスの相手がいないから」「セックスの相手を信用しているから」などの不確実な根拠に基づくものもそれぞれ約 2 割程度いた。「いつもコンドームを使っているから」という理由は 16.5%だけであった。

また、過去 1 年間のセックスの相手が 5 人以上の学生でもその 50%は HIV 感染リスクが「全くない」「非常に低い」「低い」と答えていた。

性行動が活発化していく中で、HIV 感染を自分にも起こりうる問題だと捉えている学生は

少なく、セックスに付随するリスクについて正しく認知できていないことが明らかになった。

3) 性知識の情報源

2005 年の調査⁶⁾では男子では、セックスについての情報源はポルノ雑誌/アダルトビデオ (63.9%)、友人 (52.8%)、インターネット (32.0%) の順に高く、女子ではコミックス・雑誌 (53%)、友人 (52.8%)、恋人 (42.2%) の順であった。避妊についての情報源は男子で、学校の授業や教科書 (48%)、友人 (33.6%)、学校の先生 (22.9%) の順で、女子では学校の授業や教科書 (53.1%)、コミックス/雑誌 (35.9%)、友人 (32.8%) であった。

では男子では、セックスについての情報源はポルノ雑誌/アダルトビデオ (63.9%)、友人 (52.8%)、インターネット (32.0%) の順に高く、女子ではコミックス・雑誌 (53%)、友人 (52.8%)、恋人 (42.2%) の順であった。避妊についての情報源は男子で、学校の授業や教科書 (48%)、友人 (33.6%)、学校の先生 (22.9%) の順で、女子では学校の授業や教科書 (53.1%)、コミックス/雑誌 (35.9%)、友人 (32.8%) であった。

男子においてはビデオで行なわれているコンドームなしのセックスや暴力的なセックスをそのままセックスのイメージとして定着させてしまう恐れもあり、情報を読み解く力を身につけていくことが必要である。しかし、避妊については約半数が授業や教科書を情報源としており、大学での講義も彼らにとって有効と思われる。

女子においては、セックスについては友人、雑誌からの情報のみならず、恋人からも情報を得ていることが特徴的であった。このことは、男性がアダルトビデオやポルノ雑誌から得た不確かな情報を女性がそのまま信じてしまうという可能性があり、危険である。また、男女ともに「友人」が情報源になっている割合は高く、本人だけではなく友人も巻き込んで STD

や望まない妊娠の予防を呼びかけていくことが効果的であることが示唆された。

4) 性に関して知りたいこと

2005 年の調査⁹⁾では、男子は特に知りたいことはない (34.9%)、男女の心の違い (30.1%)、恋愛 (27.7%)、性感染症、HIV/エイズの知識 (23.4%) が上位 4 つで、女子では男女の心の違い (33.1%)、性感染症、HIV/エイズの知識 (27%)、特に知りたいことはない (26.5%)、性の不安や悩みの相談の仕方 (24.1%) の順であった。

特に知りたいことはないも上位にあるが、年齢を重ねるごとにその割合は減っていつている。また男女ともに性感染症、HIV の知識を知りたいとは思っており、また年齢が上がるにつれその割合も高くなっている。同様に女子で高い、性の不安や悩みの相談も年齢とともに高くなっている。このことから、大学生になり、性行動が活発化する中で具体的に知りたいことが増えていることが伺える。そのような時期に、男女ともに知りたい欲求が高い男女の心の違いを取り入れながら、性教育や情報提供を行なうことは有意義であると考えられる。

II. STD 及び望まない妊娠の予防に対する効果的な介入内容・方法の指針

—文献検討結果より—

1. 介入内容

STD 及び望まない妊娠の予防に対する効果的な介入内容として、1) 国際的基準、2) コンドームの活用、3) 性の健康に関して肯定的な価値観や意識の育成の必要性、の 3 つの視点について以下にまとめた。

1) 国際的基準

UNAIDS (国連合同 AIDS 計画) を中心とする国際的言説から青少年に対する有効なエイズ教育の視点として、以下の 2 点がある¹³⁾。

①疾患予防だけでなく性の健康 (Sexual

Health) という視点及びジェンダー固有のニーズにも視点を合わせて保健行動を促進する。

②社会や集団のもつ性の価値観や態度の影響を考慮し、集団の性的意識や態度の変容も促す。

2) コンドームの活用について

(1) コンドームの使用に自信を持てるよう
コンドームに慣れる

性交経験のある男女 (18 歳—25 歳) に行なった質問紙による保健行動調査によると、コンドーム使用行動に影響する因子分析の結果、男女に共通のこととしてコンドームの使用が妨げられる背景要因には、スムーズな装着が苦手であるなどコンドーム使用に対する自信感がないことがあげられた¹⁴⁾。このことからコンドームの使用を促進する介入内容として次の点が挙げられる。

『男女ともに、コンドームの使用に自信をもてるようにまずはコンドームに慣れることから始める。』

(2) コンドームの使用を話し合う行動の強化

またもう一方で、性交経験のある男女 18 歳—25 歳の大学生、短大生、専門学校生に行なわれた、HIV/AIDS・性感染症・望まない妊娠の予防行動に関する質問紙調査¹⁵⁾がある。それによると女子では、性交を伴う関係の開始期における、HIV/AIDS・性感染症・望まない妊娠の予防行動に関して、「避妊についての情報収集をする」や「避妊法を考えておく」という行動については役割期待 (相手にその行動を期待する)・役割認知 (自分もその行動をやるべきだ) とともに肯定率 9 割を占めたが、「最初のセックスをする前に、避妊についての話し合いを持ちかける」についてはともに肯定率が 6 割程度という結果であった。男子においては、「コンドームを用意する」行動で役割認知が肯定率 8 割以上であったが、「最初のセックスをする前に、避妊についての話し合いを持ちかけ

る」行動の役割認知の肯定率は2,3割程度という結果であった。

男女とも（特に男子において）、情報を集めたりコンドームを準備したりする行動に比べ、避妊について話し合う行動が取られにくい現状が浮き彫りになっていることから、コンドームの使用を促進する介入内容として次の点が挙げられる。

『男女ともにコンドームの使用を話し合う行動の強化を行なう。』

（3）コンドーム使用による避妊やSTD予防の効果を実感できるようにする

また、18歳–25歳の大学生男女に行なわれた質問紙調査¹⁴⁾より、コンドーム使用によって得られる避妊や性感染症予防の効果に関して、性交経験者と性交未経験者では、性交経験者の方がその効果に対する評価が低かったことが明らかとなった。

このことに関連した見解として、性交経験が積み重なり、1, 2回コンドームなしのセックスをしてヒヤリとしたが、結果として妊娠も感染症にもならなかった経験がコンドームの効果に対する評価を低め、「（使用しなくても）まあいいか」という気持ちを強め、コンドームを使用しないセックスが事実化していくのではという見解もある^{5), 16)}。つまり、コンドームの使用が継続されない理由の1つに、コンドームを使用したことによる効果が得にくいという点があると言える。このことから、コンドームの使用を促進する介入内容として次の点が挙げられる。

『コンドームを使用したことによる避妊やSTD予防の効果を実感できるようにする。』

3) 性の健康に対する肯定的な価値観や意識の育成の必要性

性交経験のある高校生と大学生に行なった質問紙調査¹⁷⁾によると、HIVなどの感染予防行動（感染予防に関する情報収集、感染予防に

ついて話し合う、あらかじめコンドームを用意し携帯する、検査を受ける）が起きるには感染予防行動に対する肯定的な態度（よいと思うかどうか）、行動意図（自分で行なおうと思うかどうか）、規範意識（周囲はどのように考えているか）が大きく影響していた。一方でエイズに関する知識は影響していなかった。

また、性に対する価値観と避妊行動との関係を大学生の男女に質問紙調査し、性に関する価値観を開放的な群と保守的な群に分けたところ、男女ともに性に関して開放的な群の方が望ましい避妊行動をとっていたことがわかった。このことより、性教育を考える際に性に関する価値観は重要な要素となる可能性が示唆された¹⁸⁾。

以上のことより、予防行動を起こすための効果的な介入内容として次の点が挙げられる。

『知識中心の性教育ではなく、性の健康に関してポジティブに捉えられるような価値観や意識の育成を図る。』

2. 介入方法

STD及び望まない妊娠の予防に対して効果的な介入方法として、1) 国際的基準、2) 行動変容への介入、3) スキルトレーニングによるSTD及び望まない妊娠の予防への介入、の3つの視点について以下にまとめた。

1) 国際的基準

UNAIDS（国連合同AIDS計画）を中心とする国際的言説から青少年に対する有効なエイズ教育の視点として、以下の3点がある¹³⁾。

- ① 青少年の安全な性行動をとる能力を認め、ひきだす工夫をする。
- ② 青少年の意識や行動に影響するピアプレッシャー（仲間との共有の経験や価値観へと向かわせる圧力）を有効に活用する。
- ③ 保健行動について具体的で支援的なメッセージを繰り返し提供する。

2) 行動変容への介入

(1) 女性の行動変容を促進させるには愛情と保健行動を切り離す

性交経験のある男女（18歳～25歳）に行なった質問紙による保健行動調査¹⁴⁾によると、コンドーム使用に関して影響を与える因子に、男子に見られない女子に特徴的なものとして「愛情」「信頼」「一体感」「相手との関係性参照」があった。つまり、予防の観点から考えればコンドームは相手が誰であろうと使用するべきであるが、女子においては、愛情を持ち信頼できる相手であるかどうかということにコンドームの使用が左右される現状が浮かび上がった。このことから女性の行動変容への介入方法として次の点が挙げられる。

『女性の行動変容を促すには愛情や信頼関係と保健行動を切り離して考えられるように支援する。』

(2) 男性の行動変容を促進させるにはコンドームに対するイメージ転換を図る

一方、同研究において男子では、女子に見られない特徴的なコンドーム使用に関して影響を与える因子に、「コンドームイメージ」「性の健康についての関心」「コンドーム使用への不安感」があった。つまり、男子においてはコンドームに伴うイメージやコンドームをうまく使うことができるかどうか、ということによってコンドームの使用が左右されている現状が浮かび上がった。このことから、男性の行動変容への介入方法として次の点が挙げられる。

『男性の行動変容を促すには「コンドームの使用はカッコいい」、という肯定的なイメージ転換をできるように支援する。』

3) スキルトレーニングによる介入

18～22歳の専門学校生（女性）に対して、HIV/AIDSの知識中心に教えた群と、ライフスキルトレーニング（コンドーム使用の話合いのロールプレイやコンドーム装着・取り外しの

練習など）を中心に実施した群でコンドーム使用に関する自己効力感を比較した調査¹⁹⁾がある。介入前と後、さらに1ヵ月後に質問紙調査でコンドーム使用自信感をたずねた。

コンドーム使用自信感の尺度は「自分でコンドームを購入する」「ふだんコンドームを携帯する」「相手が正しくコンドームを使うようにさせる」「二人が性的な関係になる前に相手と前もってセックスのことについて話し合っておく」の4項目と、記述されたシナリオの場面でコンドーム使用を要求することができるかどうかを、自分や相手がどの立場にあるかによって質問していったものである。

その結果、ライフスキルトレーニングを受けたグループは、介入前よりもそれが著しく増加し、さらに1ヵ月後の調査でも効果は維持された。一方、知識中心のグループでは介入前後において知識の変化量が上昇したものの、自己効力感の変化は見られなかった。

以上のことからSTD等への予防行動を起こし、継続していくための効果的な介入方法として次の点が挙げられる。

『知識伝達中心ではなく、より現実の性的場面に即した実践的な予防介入方法を用いる。』

III. おわりに

性について知りたいことは高校生よりも大学生の方が関心が高く、彼らのその要求を見過ごすことはできない。また、今回は効果的な予防教育のあり方を文献から検討したが、性の不安や悩みについての相談の仕方を知りたいと思う女性も多く、気軽に相談できるような場所があるなどの支援体制も必要となってくる。また、情報の与え方についても彼らがよく使うインターネットでの提供や、彼らの関心を引くようなパンフレットなど、検討する余地がある。

また、ヨーロッパではHealth Promoting Universityという大学全体で学生の健康促進に取り組む大学があるが、日本ではこのような試みはまだない。しかし、STD、望まない妊娠を

予防するためには個人の努力のみで取り組んでいくのではなく、そのような環境を整えることも重要になってくる。

これらを踏まえ、相談できる場所、情報提供、といった環境作りを今後は検討していきたい。

[引用文献]

- 1) エイズ・性感染症一わが国のゆくえ 木原雅子, 木原正博

SEXUALITY No.007 22-28 2002

- 2) 平成17年度 保健・衛生行政業務報告(衛生行政報告例)

<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/eisei/05/kekka5.html>

- 3) 感染症報告数(五類感染症【定点把握】) 国立感染症研究所 1999-2005

<http://idsc.nih.gov/jp/idwr/ydata/report-Jb.html>

- 4) 感染症発生動向調査週報 国立感染症研究所感染症情報センター

通巻第6巻 第8号 11-13 2004年第8週

- 5) 若者と性感染症 北村邦夫 母子保健情報 第45号 59-65 2002

- 6) 「若者の性」白書 財団法人日本性教育研究会 編 小学館 2005

- 7) 大学・短期大学への進学率の推移 文部科学省 平成18年度学校基本調査速報

http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/06080115/002.htm

- 8) 看護系大学生に対する生と性の自己決定に関する学習会の実施と評価

大西真由美, 山元由美子 茨城県立医療大学紀要 第8巻 129-137 2003

- 9) 看護学生の性意識・性行動の実態と Human papillomavirus/Chlamydia trachomatis 感染との関連性

関塚真美, 笹川寿之, 坂井明美, 尾崎由佳, 小西一代, 高井久実子, 清水美香

思春期学 Vol.20 No.1 169-173 2002

- 10) 「全国国立大学生 Sexual Health Study」調査報告書

大学生の HIV/STD 関連知識・性意識に関する研究 木原雅子

教育アンケート調査年鑑 上 105-112 2001

- 11) 全国高校生の生活・意識調査 社団法人全国高等学校 PTA 連合会

教育アンケート調査年鑑 上 501-530 2005

- 12) 「若者の性」白書 財団法人日本性教育研究会 編 小学館 2001

- 13) 若者の性の保健行動を促進し有効な予防介入を図るための研究 池上千寿子ら

エイズに関する普及啓発における非政府組織(NGO)の活用に関する研究

平成12年-14年度総合研究報告書

<http://api-net.jfap.or.jp/siryoku/kenkyu/ikegami/001.htm>

- 14) 仮想ペア・データを利用した HIV/AIDS, 性感染症, 望まない妊娠の予防行動における性差の検討 徐淑子 日本保健医療行動科学会年報 Vol.14 167-189 1999

- 15) 大学生世代の性行動とコンドーム使用 徐淑子 SEXUALITY No.005 93-103 2002

- 16) 保健行動科学の視点と日本の若者の保健行動分析 徐淑子 現代性教育研究月報 Vol.21 No.4 52-57 2003

- 17) 高校生及び大学生の HIV 感染予防行動を規定する要因 五十嵐哲也 学校保健研究 44 207-214 2002

- 18) 大学生の性に関する価値観と避妊に関する知識・行動の関係 川村恵美子他 母性衛生 42巻3号 310 2001

- 19) 松本淳子, 武田敏 思春期学 Vol.21 No.4 379-387 2003